

「民族」のフレーム・アップ
——ポスト紛争期ソロモン諸島ガダルカナル島マラウ地域における
「マライタ系」言語集団の現状とその位置づけ——

橋爪太作

(東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会特別研究員 DC)

1. はじめに

南太平洋に位置するソロモン諸島では、1998 年後半から 2003 年頃にかけて、首都が位置するガダルカナル島と隣のマライタ島の住民の間で、「民族紛争 Ethnic tension」と呼称される武力衝突が発生した。この出来事についてはすでに多くの研究が公刊されているが、本稿ではその主要な現場の一つとなったガダルカナル島マラウ (Marau) 地域の現状について報告を行う¹。

2. マラウ地方の概要

地域名としてのマラウは、ガダルカナル島東端に広がるラグーン内に点在する大小の島々と、ハタレ (Hatare) と呼ばれる本島海岸線沿いの細長い平地を主に指して使われる。この地域に居住している言語集団は大きく分けて 2 つある。1 つはマライタ島南部のアレアレ ('Are'are) 語の派生形を話すコミュニティで、出自もマライタと同じ父系である²。もう 1 つはガダルカナル諸語であるビラウ (Birau) 語を話すコミュニティであり、出自はガダルカナルの他集団と同じ母系である。2004 年時点でマラウ地方の人口はおよそ 1800 人であるが、そのうち 1400 人がアレアレ、残りがビラウであるとされる (Kinch 2004)。両者の間には後述するようなさまざまなカストム (Kastom) の違いに起因する民族的な境界線がある一方で、歴史的な通婚関係やキリスト教コミュニティを通じた交流も進んできた。

3. 混雑的なアイデンティティ

マラウに関する先行文献によれば、彼らは特定の聖なる土地およびトーテム動物と関連付けられた 9 つのイオラ (iora : アレアレ語で「カヌー」を意味) を持っている

¹ 本稿の元となった調査は 2016 年 5 月～10 月にかけてソロモン諸島ガダルカナル島ホニアラおよびマラウ地域で行われた。調査ではソロモン諸島共通語であるソロモン・ピジン語を中心に、一部では現地語であるアレアレ語を使用した。

² 16 世紀スペインの航海者が残した史料には、マラウ地方でマライタ系の言語を使う集団に遭遇したことが記されている (Mendaña 1901: 344-345)。このことから、マライタとこの地域との交通は少なくとも 500 年以上前から起きていると推定される。

言われていた (Kinch 2004) ³。こうしたことから、現地に入る前の調査者自身もマラウのアレアレ系住民は、言語のみならず慣習の面においてもマライタ本島のそれと同一の伝統を共有する (いわば同一民族である) と考えていた。

しかしながら、こうした想定は調査を始めて間もなく裏切られることとなる。確かに9つのイオラは存在していたが、人々 (とくに土地や系譜に関する知識を持った中高年層) はそれを「戦後マライタから持ち込まれたもので、自分たちが元から持っていたわけではない」と明確に断言した。彼らによれば、それ以前からあったのはパラニマネ (paranimane : 男の集団)、フタニマネ (futanimane : 男の血) と呼ばれる父系出自集団である⁴。

さらにあるパラニマネのチーフは、自らの一族の始祖がガダルカナル島南東部のボタ (Bota) に由来すると理解しており、そのことを後世に残すために、孫息子にガダルカナルの祖先の名前を付けていた。彼らは現在ボタの集団との継続的な親族関係を持っておらず、また出自原則 (父系) や日常的な使用言語 (アレアレ語とピジン語) などの外見上は全く他のアレアレ系住民と区別がつかない。しかし現在 30 代後半の彼の息子は、自らの本来の祖先に関する伝承を持ちながらそこのつながりを作ってこなかった父に批判的であり、自分の代になればボタの「親族」を積極的に探す意向を示していた。

このようにマラウ地域のマライタ系言語集団は、さまざまな出自の人々が流れ着き、慣習を共有するようになった混淆体であり、それを一括して「アレアレ」あるいは「マライタ人」という民族的アイデンティティのもとで捉えることは適切ではない。

4. 潜在する緊張関係

だが一方で、彼らとビラウなどのガダルカナル系住民の間には、「ガダルカナル対マライタ」という民族紛争時の敵味方区分に基づく分断が存在している。

民族紛争が始まって間もなく、南部ウェザーコーストを中心とするガダルカナル側武装勢力 Guadalcanal Revolution Army (GRA) および Isatabu Freedom Movement (IFM) は、マラウに居住するアレアレ語者を戦後ガダルカナル島の他の地域に移住したマライタ出身者とともに迫害対象とした。度重なる賠償 (compensation) の要求や家屋・財産の破壊に晒されたマラウの人々は、2000 年にマライタ側の武装組織 Malaita Eagle Force (MEF) が結成されると、自らも独自組織 Marau Eagle Force (MEF) を結成。両

³ 祭司 (hanasuu)、首長 (aaraha)、戦士 (ramo) の3つのポジションによって構成されるカヌーとしての氏族集団のイメージは、マライタ本土のアレアレにおいて共同体の理念的なあり方として流通している (佐本 2012)。

⁴ パラニマネ群がイオラにまとめられた際の基準 (父系祖先の共有など) も伝えられておらず、両者の関係は当人たちにもしばしば不明瞭で非真正なものとして映っている。

者の連合軍は当時ハタレ地域一帯を占拠していた IFM との間に激しい戦闘を繰り返した。

2001年にオーストラリアの仲介でマラウ和平協定（Marau Peace Agreement）が締結され、公式に戦闘状態が終結した。さらに紛争終結後現在まで NGO や政府の支援プログラムが継続的に実施され、またキリスト教などの共通の価値を通じた和解が進められた結果、表面的には社会生活は紛争前の平和を取り戻したかのように見える。しかし敵味方に分かれて互いの生命や財産を奪い合った経験は未だ生々しく残っており、ガダルカナル系住民、なかんずく日常的に生活を接するビラウとの間には潜在的な緊張関係が存在している。

5. 「民族」のフレーム・アップ

では、いかにしてマラウのような混淆的なコミュニティが「民族」的な対立の一方の当事者となってしまったのか。

紛争が激化し始めた 1999 年頃、当時マライタ島の州都アウキに滞在していたある男性は、IFM がガダルカナル島のマライタ移民を武力で排斥し始めたというニュースを聞いて、「マライタ人に復讐されるのではないかと」恐れて逃げ帰ったという。このようにマラウ地域のマライタ系言語集団は自分たちが当初からマライタ側であるという自覚を持っていたわけではない。また武装勢力の側もマラウに対しては物品をねだったりあるいは土地の占拠に対する賠償の支払いを要求したりといった嫌がらせは行ったが、他の移民と同じような強制的な追い立ては行わなかった。

1999 年 7 月に IFM が行ったガダルカナル島北部での総攻撃に際し、彼らはマラウからアレアレ系とビラウ系の十数名の若者を義勇兵として徴発した。しかし兵員輸送船が途中で警察の警備艇に拿捕されると、逮捕者の中にマライタ系の言語を喋る者がいたことがマラウの立場についてのマライタ側の疑念を招いた。マラウの主だった人々がガダルカナルからの決定的な離反を決意し、当時マライタ島民の間で密かに組織されていた MEF への接近を始めたのは、この事件があってからである。

そもそも民族紛争の直接の背景は、戦後ガダルカナル島北部を中心に行われた開発の労働力として多くのマライタ人が同島に移住し、それがガダルカナル島民との間でさまざまな摩擦を生じさせたことにあると言われている（関根 2002）。実際、紛争の発端となったガダルカナル州知事エゼキエル・アレブアによる政府への要求でも、主に首都ホニアラとその周辺地域で引き起こされた諸問題（戦後発生したマライタ人によるガダルカナル人の殺害、譲渡地の返還など）が取り上げられている。

しかしこうした近代化に伴う問題が「マライタ対ガダルカナル」という枠組みによって表現された結果、マラウの人々はある意味巻き添えを喰った形で紛争の「マライ

タ」側あるいは「ガダルカナル」側の当事者へと押し出されてしまったのである⁵。

マラウ和平合意に先立つ和平交渉では、紛争の被害賠償とは別に独自の行政単位の設立や平和維持軍のマラウ地域への駐留などを内容とする、ガダルカナル州政府からの事実上の独立要求がマラウ側からなされることとなった（Marau Peace Talk 2000）。こうした事柄のほとんどは実現することはなかったが、表面化したマラウとガダルカナルのその他の地域との亀裂は、現在に至るまで両者の「民族」的対立として根強く残り続けている。

6. おわりに

「マラウはアレアレとは別だが、互いに強い関係を持っている。もしここで何かが起こったら、ガダルカナルとマライタの両方を巻き込んで大変なことになるだろう……我々は紛争によって新たな暴力の使い方を知ってしまった。次に紛争があればもっと悲惨なものになる」（2016年8月24日のフィールドノートから）。これは先述のマラウ和平交渉にも関わった地元チーフの一人が調査者に語った言葉である。この言葉に示されるような、マラウの現在の平和が非常に微妙なバランスの上に成り立っており、それがひとたび崩れたらどうなるか分からないという懸念は、マライタ系、ガダルカナル系問わずこの地に長く居住している人々から広く聞かれた。

現在のマラウ社会の表層を覆う「民族」的な対立の下には、長年慣れ親しんだ生活の場が紛争を経て二つの島の対立の現場へと変貌してしまったことに対する、人々の戸惑いと悲しみが見え隠れしているように思えてならない。

【謝辞】

ガダルカナル島での調査を許可していただいたソロモン諸島国教育・人材開発省、同国立博物館、ガダルカナル州政府、およびマラウ滞在中にお世話になったすべての人々に御礼申し上げたい。また、調査費用の一部は2016年度東京大学卓越大学院試行プログラムにより助成された。ここに改めて謝意を記したい。

【引用文献】

Kinch, Jeff

2004 *The Marine Aquarium Trade in the Solomon Islands, with Specific Notes on Marau Sound*,

⁵ さらにガダルカナル側が一枚岩ではなく、各々の武装勢力のリーダーがアレブアの要求とは必ずしも一致しない独自の思惑で動いていたことが、問題の焦点を拡散させ紛争のマラウへの拡大を容易にした。

Guadalcanal (A Report prepared for the Marine Aquarium Council and the Foundation of the Peoples of the South Pacific-International).

Marau Peace Talk

2000 *Proposals for a Marau Peace Agreement.*

Mendaña, Alvaro de

1901 *The discovery of the solomon islands by Alvaro de Mendaña in 1568 vol.2.* Translated by Lord Amherst of Hackney and Basil Thomson. The Hakluyt Society.

佐本英規

2012 「土地をめぐる軋轢と土地保有の図式—現代ソロモン諸島マライタ島南部アレアレにおける土地をめぐる表象」『日本オセアニア学会ニューズレター』104: 1-11.

関根久雄

2002 「「辺境」の抵抗—ソロモン諸島ガダルカナル島における「民族紛争」が意味するもの」『地域研究論集』4(1): 63-86.